

「出会い」が
背中を押してくれる
ターニングポイントに

Role Model 04

佐藤あゆみ

大学院先端科学研究部助教

大学教員
→ JSPS・PD（研究員）
→ 大学院（修士・博士課程）
→ システム科学技術学部

Profile さとう・あゆみ 岩手県出身。2012年秋田県立大学システム科学技術研究科総合システム科学専攻修了。博士（工学）取得。2009年日本学術振興会特別研究員DCI（秋田県立大学総合システム科学専攻）。2012年日本学術振興会特別研究員PD（岐阜大学社会基盤工学科）を経て、2012年9月より現職。

学部1年から研究をスタート そこで運命の出会いがあった

私の出身校には学部1年生から研究を行える自主研究制度がありました。各グループに予算と指導教員ひとりをつけて自主研究をさせるという試みです。この時の研究は「骨材膨張によるコンクリートのひび割れ」でしたが、それが「コンクリートの界面とひび割れ」という現研究テーマに繋がる、運命の出会いになったのです。自主研究や卒業研究を通じて、「知ることの魅力」や「未解決のことを解き明かしていく高揚感」を知ることができました。この情熱が今でも研究への原動力となっています。

学生時代を振り返ると、角館・木匠塾（建築を学ぶ東北地方の学生が集い、コンペによる作品選定および木材で製作を行う団体）に参加したのが良い思い出です。毎夏、10日間の集団生活の中で製作活動を行い、自分たちの設計が実物となった達成感は一入のものでした。約80名との共同作業だったので、多くの衝突もあり夜通し話し合う日々でしたが、「何があっても期限内にひとつのものに結実させなければいけない」という

建築に対するスタンスはここで学びました。また、設計や理論と現実のギャップがどれだけ大きいのか、理論だけではなく実際にモノに触れ作ることの重要性を学べる最高の経験でした。

1冊の本と、海外研究者との出会い。 進むべき道が見えた瞬間

将来の職業の選択肢に、「研究者」が並ぶようになったのは学部3年生の時でした。しかし、就職や結婚など様々なことを危惧し、夢との間でずいぶん心が揺れました。その中で『親愛なるマリー・キュリー／女性科学者10人の研究する人生』という本を読み、女性研究者の先輩たちが勇猛果敢に、そして意外と楽天的に人生を歩んでいる姿に背中を押してもらいました。

また、恩師の厚意で、スイス連邦工科大学のスクリプナー教授にお会いする機会を頂いたことがあります。有名な女性研究者として、世界の最前線に居るスクリプナー教授が1秒を惜しまずに研究する姿に圧倒され、同時に国籍、性別や年齢に関係のない研究グループのトップとして多くの研究者を率いる、その凛とした態度から、女性研究者のあるべき姿を見ることができました。



これは、私にとって何よりの叱咤激励であり、進路決定の大きな契機になりました。

「好きこそものの上手なれ」 継続していけるものを見つけよう

現在は、建築構造材料のコンクリートを研究しています。コンクリートは鋼材や木材のように既製ではなく、使用材料（セメント、砂利、水など）と調合設計（材料の比率）を任意で変えることができます。つまり、コンクリートは様々な要素を検討して操作できる点が群を抜いて多いため、研究者の創造力が必要とされる材料です。熊本大学に着任してからは、建物の長寿命化を図るために耐震補強技術、新素材・高機能性材料の応用技術について、様々な実験や解析を行っています。

将来に悩んでいる学生にアドバイスをするならば、「自分が好きなことや没頭できることは何か」を突き詰めて考えることをおすすめします。「好きこそものの上手なれ」とよく言いますが、好きなことは継続できるものです。コツコツと継続することで、自分が想像している以上に、速く、そして新しい世界に行けると思います。



元気なわが子の誕生にひと安心

10年後の 目標は？

研究者であると同時に教育者として成長したい。建築材料学を通じて技術者・研究者を育成出来る先生になること。10年後は職場でも家庭（子育ても頑張りながら）でも笑顔でいられるようワークライフバランスを調整できるようになること。

整理・整頓と旅行でリフレッシュ！